

文化財と技術

第2号

2002年5月

文化財と技術の研究会

目 次

≡研究論考≡

福島県内出土古墳時代金工遺物の研究

－ 筑内古墳群出土馬具・武具・装身具等、真野古墳群A地区20号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作－

(復元研究プロジェクトチーム) 1

第一部 復元研究の目指すもの

- 〔1〕復元の企画(森 幸彦) 1
- 〔2〕古代遺物復元研究の未来とその手法(鈴木 勉) 9
- 〔3〕復元研究対象遺物の選定と研究課題(鈴木 勉) 14
- 〔4〕ものづくりの立場から見た復元研究の体制について(押元信幸) 22
- 〔5〕筑内古墳群出土遺物の自然科学的調査
(菅井裕子・渡辺智恵美・平尾良光・榎本淳子・早川泰弘) 27

第2部 復元研究の経過

- 馬具の復元 36
- 〔6〕筑内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について(桃崎祐輔) 36
- 〔7〕古墳時代金属装木製鞍の復元(古谷 毅) 75
- 〔8〕筑内37号横穴墓出土雲珠・辻金具の鍛造技術について(山田 琢) 84
- 〔9〕筑内37号横穴墓出土杏葉と鏡板について(鋳の製作と組立)(山田 琢) 103
- 〔10〕筑内37号横穴墓出土鉄製轡の復元製作(山田 琢) 109
- 〔11〕筑内37号横穴墓出土飾帯金具の復元について(伊藤哲恵) 129
- 〔12〕筑内37号横穴墓出土杏葉・鏡板の吊金具の復元製作(伊藤哲恵) 135
- 〔13〕筑内37号横穴墓出土締金具の帯金具と帯先金具の復元製作(伊藤哲恵) 137
- 〔14〕筑内37号横穴墓出土馬具の鉄地金銅張りの復元工程(依田香桃美) 139
- 【筑内37号横穴墓出土馬具金具類・製作工程企画表】(依田香桃美) 167
- 〔15〕筑内37号横穴墓出土鞍・締金具の復元について(高橋正樹) 176
- 〔16〕筑内37号横穴墓 木製鞍・鐙の想定復元製作(小西一郎・鈴木 勉) 183
- 〔17〕出土しない敷物、紐、革製品を復元する(押元信幸) 200
- 〔18〕筑内37号横穴墓出土馬具／復元馬具の調整・組立について(押元信幸) 205
- 〔19〕筑内37号横穴墓出土馬具の調整・組立について(山田 琢) 209
- 大刀の復元 216
- 〔20〕筑内6号・26号横穴墓出土大刀の構造と復元案(菊地芳朗) 216
- 〔21〕筑内6号横穴墓出土大刀の鉄地銀被せの技術について(押元信幸) 223
- 〔22〕筑内26号横穴墓出土大刀の復元経過について(押元信幸) 227
- 〔23〕筑内6号横穴墓出土大刀鞘と柄の製作(小西一郎) 233
- 〔24〕筑内6号横穴墓出土大刀の柄の紐巻きについて(五味 聖) 235

刀子の復元	236
〔25〕 筑内21号横穴墓出土刀子と装具の復元について（清喜裕二）	236
〔26〕 筑内21号横穴墓出土刀子の鞘・柄の製作工程（五味 聖）	241
矢の復元	243
〔27〕 筑内 6 号横穴墓出土矢の復元について（清喜裕二）	243
〔28〕 筑内 6 号横穴墓出土鉄鏃と矢の製作技術（山田 琢）	246
耳環の復元	257
〔29〕 筑内古墳群出土銅芯銀箔張り鍍金耳環復元製作実験（高橋正樹）	257
銅鏡の復元	262
〔30〕 筑内37号横穴墓出土銅鏡の復元について（押元信幸）	262
〔31〕 筑内37号横穴墓出土銅鏡の鑄造復元工程（長谷川克義）	264
金銅製双魚佩の復元	266
〔32〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩（甲）の復元製作（松林正徳）	266
〔33〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩（乙）の復元製作（黒川 浩 鈴木 勉）	279
〔34〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩のワッシャーと目玉を復元する（依田香桃美）	282
〔35〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩の鉤と組立について（山田 琢）	292
第 3 部 復元研究から何が見えるか	
〔36〕 鉄地金銅張り技術の復元作業から見えること（依田香桃美）	297
〔37〕 古代の分業と復元研究過程の分業について（押元信幸）	310
〔38〕 復元研究プロジェクトチームの運営について（鈴木 勉）	312
〔39〕 復元研究を終えて（押元信幸）	318
〔40〕 まほろんの復元展示（鈴木 勉）	321
〔41〕 あとがき（森 幸彦）	324

≡文化財報告≡

一里段 A 遺跡の工事中立会に係る記録報告（今野 徹・伊藤典子）	329
法正尻遺跡65号住居跡の縄文土器（松本 茂）	341
文化財データベースについて	
ーその 1 基本構造と遺跡データベースについてー（藤谷 誠）	345

≡研究論考≡

福島県内出土古墳時代金工遺物の研究

一 茨内古墳群出土馬具・武具・装身具等、

真野古墳群 A 地区 20 号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作一

復元研究プロジェクトチーム

工芸文化研究所 鈴木 勉

松林彫刻所 松林 正徳

黒川彫刻 黒川 浩

工芸作家 小西 一郎

Lemi's Metalwork Studio 依田香桃美

東京芸術大学美術学部 長谷川克義

東京芸術大学美術学部 押元 信幸

東京芸術大学美術学部 山田 琢

ambi ARTJEWELLERY&CRAFTS 高橋 正樹

鍛金作家 伊藤 哲恵

文化財と技術の研究会 五味 聖

東京国立博物館 古谷 毅

筑波大学歴史・人類学系 桃崎 祐輔

宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室 清喜 裕二

福島県立博物館 菊地 芳朗

福島県文化財センター白河館 森 幸彦

(財)元興寺文化財研究所 保存科学センター 菅井 裕子 渡辺智恵美

東京国立文化財研究所 保存科学部 平尾 良光 榎本 淳子 早川 泰弘

〔39〕 復元研究を終えて

押 元 信 幸

1 福島県との共同研究として

今回、この復元製作を共同研究という形をとらせていただいたことは、福島県教育庁文化課側には大変な苦勞をかけることになってしまった。復元製作工程の中では遺物からだけでは分かり得ないことや、専門分野以外の想定復元品などの仕様も決定しなければ、展示に堪える復元品にならないと考えていたからである。結局、最終判断をいつも施主であるという理由で福島側の森氏にお願いする事になってしまった。

しかし今回は福島側の強い希望で、触れる、乗れる、使える復元品を製作するということを貫き通せたことは、今までの復元実験よりも一段階進んだ復元製作であると思っている。この方針により使用強度まで考えた実用品を製作できたことはもちろん、当時の工人の工夫が垣間見られたように思えたからである。

しかしその反面では、製作中から強度的に大丈夫か？という検討事項が加わったため、製作の側にも多少の戸惑いが出たことは、当然のことである。

2 復元研究の目的はこれで良いか

復元製作を行う前の観察では、材質の確定と内部構造の把握が重要である。ものづくりの立場だけの遺物観察では、しばしば現代のものづくりと同じ視点で観てしまい、材質や内部構造を誤認してしまう恐れがある。

しかし、状態の良くない遺物の場合は、材質を想像しながら観察することが必要である。つまり今回のように、ものづくりの立場と考古学の立場と両方で遺物観察することが、より正確で、より深い観察結果を得ることにつながると思われた。

製作図面を最初に考古学研究者の方から提出してもらうことで復元製作を進めたのであったが、製作図面を修正しながら何度も試作を繰り返し、復元製作品を作り終えて感じたことは、最初に提出してもらうはずの復元製作図面を作るために、この復元製作をしていたのではないかということである。

そしてこの図面は、今後の研究者によって何度も書き直しされるような研究材料になり、更に新しい調査方法の確立や新しい学説などにより、出来るだけ当時の製作図面に近付くための資料になっていくことを願っている。

復元製作に対してわれわれ「ものづくり」の立場では完成品を納める仕事の意識が強く、自分の腕前を披露する場になってはいないだろうか？これでは博物館の展示の見栄えは良くなるが、共同研究の目的とは少しずれているのではないか、またその意識がもっと強くなり結果を焦り過ぎると問題点を都合良く捏造してしまう恐れすらある。常に飾り立てることなく、先入観を捨てて復元製作に臨まなければならない。

我々の目指す復元研究の目的は、ものづくりと考古学双方の研究者の共同研究として、博物館展示の場を借りて発表することで、より正確な研究を視覚により人々に伝える事ではないかと思っている。

3 復元研究の基本条件はこれで良いか

遺物観察において、クリーニング時の資料は重要なものである。それは表面の痕跡には復元品の仕上げの工程に係わってくる貴重な情報が沢山あるからである。金属製品の場合、その表面仕上げが、鏡面であるのか、どの程度の荒さで仕上がっているかで、どの様な色の仕上げであったのかが推測できる可能性がある。この表面の仕上げにより復元品の印象が一変してしまう。この仕上げの工程は重要な問題であるにもかかわらず、問題点を先送りしている感がある。このような視点から、観察する遺物の表面痕が、クリーニング時に付いたものかどうかは、把握しておく必要があるのである。

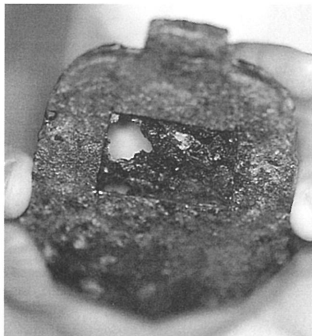


写真1 切断の痕跡

今回の筑内の復元品の原資料である金銅鏡板の一枚は、残念なことに裏の鉄の板が意図的に四角に切り取られていた(写真1)。それは貴重な文化財を切断するとは何事だと怒っているわけではなく、その内部構造を見るために切り取ったのであれば、その調査結果は記録として残す必要があったのではないか。その切断した行為によって、得ることのできた情報も文化財の一部と考える意識が大切であるということである。

今回も貴重な遺物を手にとって触らせていただき、貴重な文化財を傷めてしまったと言われても仕方がない。しかし、この研究により明らかになったことが、新たにその文化財の価値をあげるものと信じて、文化財の復元製作に取り組まなければならない。そして慣れないながらも、作り手である我々も復元研究によって分かったこと、分からなかったことを復元品と報告書によって記録しなければならない。共同研究という形をとる以上、この点は復元研究の基本条件であると思われた。

4 復元製作はこれで良いか

金属製品の遺物からは、鉄製品の場合を除くと遺物原形の寸法を推定できる事が多い。それらの観察からは材質と製法などがよく読みとれる。しかし、これからの課題としては、金属の仕上げの色を最初から重要な問題とすべきである。

残念な事に金属製品の復元品の仕上げは、先入観で決定されている可能性がある。たとえば銀は磨きあげた銀色、鉄は漆の焼き付けによる黒色などという例はあたりまえの様に復元製作で使用されている。では銅の色はいったいどのような色に仕上げしていたのかといった時に、未だに明確な答えがないのが現実であろう。

これは、古墳時代の人々の美意識を探る大変貴重な情報となる。そのためには遺物の科学的分析、遺物や素材の生産場所の特定、その遺物の持ち主の社会的地位、その遺物に関わる周辺

第3部 復元研究から何が見えるか

の衣類や建造物の色見などの情報収集が大切になる。金工・漆工・木工・紐など工芸技術の集大成である大刀は当時の美意識を発揮する最高の舞台と考えられる。その大切な色味を含めた仕上げをほとんど想定で決めていくような復元製作では、作り手の美意識が入り過ぎていないだろうか。この点を考古学研究者らと共同で作り上げることが今後の復元研究の課題ではないかと思われた。

文化財と技術 第2号

2002年5月25日印刷

2002年5月31日発行

編集 森 幸彦・鈴木 勉

発行 文化財と技術の研究会

代表 鈴木 勉

発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所

理事長 鈴木 勉

東京都品川区上大崎 1-9-4 (〒141-0021)

印刷所 株式会社山川印刷所

福島市庄野字清水尻 1-10 (〒960-2153)